

岩波
講座

日本文学史 第四卷 中世

中世仏教と中世文学

— 仏教と文学 —

— 唱導文芸 —

斎藤清衛

菊地良一

岩波書店

中世仏教と中世文学

菊 斎

地 藤

良 清

一 衛

仏教と文学・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・斎藤清衛・三

唱導文芸・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・菊地良一・四

仏
教
と
文
学

斎
藤
清
衛

目次

一 序	五
二 仏教と中世文芸との交渉	九
一 人生の無常観	一〇
二 思唯深心	一四
三 隱栖庵居	一八
四 積極的行動に対する懷疑	二四
五 念仏往生への本願	二六
六 聖賢の徳行や名言回顧	三三
三 結	三三
参考文献	三九

一 序

初めに一とおり題義を述べる。およそ「日本仏教」ということばには、(一)上代の日本群島に輸入された仏教一般の意味と、(二)アジア大陸を越えてきた南ア教を、日本島民の信仰心に適応させて国内に普及させて出来た宗教——という意味との両側面が考えられる。もっともその両面の区別も明確ではないが、大観して前者は、欽明天皇十三年(五五二)朝鮮百済の聖明王が仏像と經論とを伝え献上した結果から、三論宗や成実宗やの各派が優勢となり、国民の信仰をあつめたものを含んでいるのである。

かくて平安朝の初期には、大聖空海や最澄やが入唐して持帰った天台宗、真言宗の普及を見(延暦二十四年と大同元年)、特に公家層の中に、奈良六宗とか平安八宗とか呼ばれてわが文化史上に跡をとどめた宗派を見るに到った。その後平安朝時代末期頃から既成仏教の分裂によって、さらに国民性に適合した一部が特に維持されて、法然(長承二年一三三二—建暦二年一三三二)、親鸞(承安三年一三三二—弘長二年一三三二)、日蓮(貞応元年一二三二—弘安五年一二八三)等の高僧が新しく開いた念仏宗や日蓮宗やが始まり国民の顧るところとなって総合され「日本仏教」と呼ぶものが後者がわを指すわけである。

ところで、これに続いて「中世国文学」ということの語義であるが、本章では同時代前後の宗教文化と文芸文化との交渉を究めることを主題としたものである。その中世文学の文学史的範圍を規定しておくことを前提とするが、およそ宗教と芸術とは相共に、ある一国の文化組織に参加する肝要な両部門である。仏教が仏刹や仏像、また法語や和讃等から考察される時、芸教両側の分界や差別が不明確になる実例はきわめて多い。そこで中世の期間というものを、従来の一般国史家が指摘したいいわゆる「鎌倉室町」という武家封建制時代を含むものと考えて、ただちに連想を強い

られるのは、その時代前後の集と思われる『発心集』、『宝物集』、『沙石集』等宗教説話集である。しかしこれは厳密に文学作品と考えるものであるか否か。こうした問題は、詩歌集の中にも当然ありうる筈のもので、例えば、『新古今和歌集』の雑部以下の一・二〇の両巻は、神祇歌と釈教歌とを附加したものであって、「法華經二十八品の歌よみ侍りけるに方便品、唯一乗法の心を」と題された類のものを、四季歌のものと同一扱いにすることの不合理から来ている。といって、その集録時代が後白河法皇の頃まで遡られる『梁塵秘抄』の残篇は、宗教関係の歌謡に富んでいるが、調律の上から、今様唄そのものを味い得ることに異存があるまい。

およそ、思想や觀念やの分析からみて、宗教文化と芸術文化との中間には、双方から相かさなりあう部面もある以上、いわゆる宗教文学に対し、「文学作品に書かれた神仏思想」ということばなども、自由に使用されねばならぬ。そこで本論文においても、刻銘に形式方面のみを究明することなく、親鸞物・道元物等これまでの社会が見のがしてきたものを対象にして文学自体との交渉を看することを主眼とする。なお、また、文学の意味が、文字の表現に因ることを思えば、本論文のような性質では、作者不明確なものについて綿密に配慮すること、必ずしもその効が多いとはいえない。そこで、自分としては、作家を問題としているかの『平家物語』については、作中に鮮な欣求浄土の思想をおもいそえることとし、筆者不明の謡曲文の引用にあつては、禅思想への浸潤程度をみるという風に、たとえ、姓氏は不明確ながらも、その人々の心底に立入って多少ながらもその宗教精神を把握するように努めるつもりである。

ここに、十二世紀の末頃から十七世紀末に到る、ほぼ五百年間のわが中世時代につき、その時代に生息した文人の功績を顧るに、それは欧州史の中世時代の状態に近く、一種の混沌期間にあたっている。その理由はいうまでもなく、中世は階級的に、中下層の武人の進出があり、前時代までの公家貴族の擁護によって流布した歌集や草子物の類が、国文学としての地位を失ったものともみられ、また、文人たちを含めての階級層の経済力が全般に低下したことにも

当てて考えられるものである。しかし、また、人麻呂・業平や、貫之・紫式部やの名で回顧される上代の文学や平安朝文学の作家たちに比べると、『新勅撰和歌集』の撰者、『金槐きんかい和歌集』の作者たちの風格にはそれぞれの特色がありそこには、時代の交代期において災禍に立たされた武家の求めるに到った宗教の全貌にも係わるものがある。難行道に対し、易行道が立てられ、聖道門を信じた心が浄土門に移るといふ、そうしたことの与えた影響も甚大のものであったであろう。

それは、やがて伝統的の天台宗の諸寺・真言宗の諸寺にも浸透した結果、各種の既成仏教の間にも自ら分派が生じ、宗旨を中心に動揺を引きおこしたのもあったが、仏教は一宗教として移行すべきでなく、何等かの絶対的觀念があるべきものである。やはり、問題はそうした理念が、環境に対しどんな反映を与え、全文化を彩ったかという点に係わるのであって、つぎに、わが中世文学の中に残し伝えられている日本仏教の代表觀念として推すべきものの数項を掲げてみる。もとよりそうした思想表現には、中世独自のものも混じているわけである。

- (1) 人生に対する根本的無常觀と、禪的の頓教を重んずる精神。
- (2) 閑寂な自然環境の中で出家し、また隱栖に対する希望。
- (3) 在世中としてひたすら現実的積極的行動を重んずる態度に係わる個人的疑惑。
- (4) 仏徳礼讃と欣求浄土とに対する希望。
- (5) 人間の社会生活に欠かれぬ慈悲心や博愛心やに就てつねに感傷的な賞美を忘れぬ態度。
- (6) 古聖賢の高徳を顧みてその尊敬を怠らないこと。

以上で、文学表現における芸術的特質となるものを特に指摘するならば、第一に対象の捉え方に直観性があつて、表現に写生味を添えることが感ぜられる。ただし、文学は、人間の言語生活を基本としての発達であるとの見方から

は、音楽や美術やのように、聴覚・視覚の官能のみにたよる態度は許容できないこととなる。文学には、文学独自に要請する想像上の作用というものがある。取りあえず、『保元物語』(葉室時長作?)を繙いてみると、「(一)後白河院御即位ノ事」と題し、「爰ニ鳥羽禪定法皇ト申シ奉ルハ、天照大神四十六世ノ御末、」と起筆されたものが、「(二)法皇熊野御参詣並ビニ御託宣ノ事」の項に移ると、「本宮証誠殿ノ御前ニテ、現当二世ノ御祈念アリシニ、夢現トモアラズ、御宝殿ノ中ヨリ童子ノ御手ヲ差出シテ、打チ返シ〜セサセ給フ。法皇大イニ驚キ思シ召シテ……」という関係の見えぬ別方面のことが出されている。

それは必ずしも現代の自然科学の知識からでなくとも、古代の人の中には、神の託宣の類を信じたものは多かっただろう。すなわち、『保元物語』の中のこの種の記事もそのままに見すごされているのである。それはやはり、『保元物語』が文学書だとする解釈につらなっている。他の諸作にも気付かれる点であるが、叙事の内容とは別に、散文は散文なりに、文脈や韻律の美をその背後に秘めている。それによって、叙述の中心は平治の乱の戦記であろうと、源義経の一代記であろうと、文学以外のものとの差別が出てくるのである。

もっともこの場合、表現の技巧が巧緻にすぎるといふことは、かえって原文の実価をおとす結果ともなってくる。

中世時代の戦記文学としては、その量で『太平記』にまさるものではなく、中に多様な思想を出した点でもそれ以上の物語ものはないともいえるが、その『太平記』が文辞の絢爛にすぎていることは、すでに諸評の一致している点である。卷二の中に、後醍醐帝が南都と北嶺に行幸されることを叙べたものに以下のような一節もある。(括弧内は加註のもの)

抑、元亨^{ゲンコウ}已^シ後^{ノチ}ハ主愁^{カレ}(ヘ)臣辱^シ(メ)ラレテ、天下未^ヤ安^ラ時、折節^{セツセツ}コソ多カルニ、今南都北嶺ノ行幸・歡願何事ヤ
ラント尋^タ(ヌ)レバ、近年サガミノ入道ノフルマヒ、日来^ヒノ不義^ゴニ超過セリ。東夷ノ輩ハ武命ニ順フ者ナレバ、召
共^{トモ}(メセドモ)勅^シニ応ズベカラズ。只山門南都ノ大衆ヲ語^フテ、東夷ヲ征伐セラレン為^ニ御謀トゾ聞エシ。依^テレ^ニ

大塔、二品親王ハ時ノ貫主ニテオハ(御座)セシカドモ、今ハ行学共ニ捨(テ)ハテサセ給(フ)テ、アケクレ(明暮)ハ只武勇ノ御嗜(ミ)ノ外ハ他事ナシ。御好(ミ)アル故ニヤヨリケン。ハヤワザハ江都カ勁捷ニモ超(エ)タレバ、七尺ノ屏風未(ダ)必シモ高(シ)トセズ。ウチ物ハ子房ガ兵法ヲ得タレバ一卷ノ秘書尽(ク)サズト云(フ)事ナシ。天台座主始(マ)リテ義真和尚ヨリ以来一百余代未(ダ)カ、ルフシギノ門主ハオハシマサズ。後ニ思合(ハ)スルニゾ、只東夷征伐ノ為ニ御身ヲ被^レ習^ヘケル武芸ノ道トハ知(ラ)レタル。(下略)

この種の記録は、如何に作者によつて聴取されてかく綴られたものか。ないし、知人の手帳の文字などを通してかく構想化されたに過ぎなかったものか。『太平記』基本の著者名さえも判らぬ現代からは、自由の臆断を許されぬけれど、宗教が宇宙世界のまことを求めるその心から、大なり小なり形成されたことを疑うことはできない。本文で、『選^ズ本願念仏集』(法然)や『正法眼蔵』(道元)(正治二年―建長五年)やに触れてゆくのも、まことを求める人の心を見ようと思うからのみである。

二 仏教と中世文芸との交渉

およそ、中世の宗教と国文学一般との交渉を考えるにおいて、まず連想される点は、人類生活における宗教と芸術との関係である。現代の芸術論の中で、誰もが特に回顧するのは、恐らくロシアのトルストイの『芸術論』(一八九七)であろうが、そのトルストイが母国の上流貴族の子弟に生れながら、その境遇に挑戦する立場から著わされた芸術論が本論なのである。すなわち、トルストイ自ら不生産的の日日を恨んでみても、人類生活の底に粘りついている思想のかたまりに変わりはなく、本書の第五章で列挙し、非難した芸術は、今なお連続して存するものと評せざるを得ない。

もっとも、そのためトルストイの美論は、空想の表現だと考えるのではない。その『芸術論』は、十九世紀時代の宗教家の美論として、十分の意味を含めている。特に、当時のロシアを背景としての論とみて、完全に近い一種の理想主義論であることを思わす。そこで、トルストイの芸術論拠を、わが中世時代の思潮に比較することはやや不穩当であるが、いずれも、時勢推移の過渡期に立っていた人々たちなのである。総じて、日本国の法師僧侶には、唐僧のあるものに多く見られるような受苦耐忍型のものはいなかったらしいが、仏典の研究などには人知れぬ苦心をするものがかなりに出た。しかも、それは一般の肉欲・物質欲について特に放縱寛大であったわけでもないが、それほど現実生活を食べる理由がなかったのである。ここに、濁世的罪劫觀においても、なまはんかで不徹底の態度が見られることになる。

しかし、藤原氏や平氏の子孫も相ついで没落の淵にのぞまされてきた十三世紀時代以降には、京洛の旧居を去りゆくものが逐年に増していった。延暦寺の隆盛は、半面にそうした登山者があつての結果である。平曲の普及から、「祇園精舎ノ鐘ノ声、沙羅双樹ノ花ノ色……」といえは、平家の末路に対する涙を催すほど、中世以後『平家物語』は、ひろく国民の口吻にかかることになったので、その一冊に人生の真相をつかめえたこともそこに因している。やはり中世時代に『平家物語』『源平盛衰記』も一異本の流布がなかったとしたら、謡曲や浄瑠璃曲やの中で構想されえぬものもほとんどその中の数十曲に及んでいたかもしれない。

一 人生の無常觀

およそ、「無常」ということを宗旨の中心の理念とする点で、仏教は他のキリスト教・マホメット教などに比べても、その類例が求めがたい教である。今は、ここに無常思想の意義を述べる余暇はないが、紀元前はやく、アジア大陸か

ら太平洋のこの一孤島に住居を求めて棲みついた集団民族の持った思想として、無常観の半ばでも諒解されたものは、その後、島内生活の氣候の変化不平均などに気付いた、それから何十年以後のことであつたのかもしれない。といつて、近畿地方の朝夕を地獄視したというわけでもなく、その間に平安朝時代という約三百年間の平和時代が消されてしまつたのである。しかし、十二世紀なかばから、源平両氏の対立を手初めとして、洛中洛外に弓箭の音が聞かれるに到つては、さすがに新世相というものの中味を考えざるを得なくなつたものであらう。

一つの悲劇というだけの評では、ここに説明しつくされぬが、『保元物語』の三卷本(下)の標題をみるに、(廿八)「義朝幼少ノ弟悉ク失ハル、事。(廿九)「為義ノ北ノ方、身ヲ投ゲ給フ事。(卅)「左大臣殿ノ御死骸実檢ノ事。(卅一)「新院御遷幸ノ事並ビニ重仁親王ノ御事。……というように目も掩われるような痛切事の連続で全巻が結ばれている。『保元物語』は、著作当時あまり普及したことは想定されぬが、保元元年(一一五六)といへば、藤原俊成が四十三歳、西行法師が三十九歳であつたなどは論外として、法然は二十四歳、栄西(永治元年—建長三年)は十六歳、平忠度はまだ十三歳、鴨長明(仁平三年—建保四年)四歳(？)、慈円(久寿二年—嘉禄元年)二歳という少年時代にあたり、時ならぬ暗雲がその生涯の中に遺していったものも決して瑣細ではなかつたのである。

やはり、生命を続ける父子、兄弟、同族知友たちが、互に相尊ぶ精神は相互愛の情であつた。人は、時に、周囲環境の変化によって、そうした親近さを打切ることも余儀なくおこるが、朝夕つねに親しく話していた対象人と別れることには多少ながらも愛惜の念を持つのが自然である。勅撰集にも、『金葉・詞花』以来、哀傷歌の部が見すてられたのを、二条為家(建久九年—建治元年)が『続古今集』の撰にあつた時、再び部立を加えて巻頭に、崇徳上皇の次のような搔き暮らし雨降る川のうたかたのうたて程なき世とは知らずや

という御製を掲げた。その他に、俊成(永久二年—元久元年)、定家(応保二年—仁治二年)、為家祖父子等のものも出されているが、

その間に、つぎの西行さいぎょう（元永元年—建久元年）の詠を二首人選させている。

誰とても止るべきかはあだし野の草の葉ごとにすがる白露

かた／＼に哀なるべき此世かなあるを思ふも無きを忍ぶも

一般に哀傷の歌の内容は、知人の死去を傷んで詠んだものが大部分であって、生命全体としての悲哀観はあまり歌われてない。この西行の歌にかぎらぬけれど、この種の哀傷歌には、おいた露の消えやすく、落ちやすいことを人命のはかないことに譬えた詠振が多い。何としても、転換した新時代相が、種々の面から時代の人心を揺がしたことは、今日の状態などと比較にならぬものだったろう。

しかし、つぎのように新登場の武家の中にもまた歌人があっただけでなく、義政や持基のような高官のものまで、無常を歌の題として詠み残しているのは、多分に観念の戯れたわむがありどの程度それが体験になりえたものかが疑われる。行末をかねて定むる人は皆明日知らぬ世を知らぬとぞ見る（「慈照院准后御集」統群書類従）

思ひやるも袖こそ濡るれ遅く疾く遂に行くなる道芝の露（「後福照院殿御詠草」同）

こうした武將の詠み残した無常歌であるが、これをもって、ただに戲言としてのみ排し捨てがたい点は、もしかれば等にして生の現実徹底していたら、いわゆる文戯としての和歌なども作らなかつただろうと思えることである。「あそび」という意味もいろいろに解釈されるが、文学芸術の成立には、その心理の一角に、この「あそび」的のものがあるものとする説は、簡単に否定しがたいところであろう。

わが国文学史も、前後四五十年にまたがったある一時代が、よく、別種の色彩を持つ各方面の文人を生み出す基盤となったことを実証しているが、鎌倉幕府の確立をみた、かの順徳天皇じゅんとく（建久八年—仁治三年）即位前後の在世文人をみるに、建保元年には、鴨長明（六十歳？）、慈円（五十九歳）、藤原家隆（保元三年—嘉禎三年）（五十六歳）、藤原定家（五十二歳）等があり、

いずれもそれぞれ文才の円熟期で、例の『方丈記』などもほぼその前後に書きあげられている。しかし、当時若かったもの、例えば蓮性れんしょう（三十二歳）、源実朝さねとも（建久三年―承久元年（一一九二―一二一九）二十二歳）、二条為家（十六歳）等が、それなりに時代の影響を受けたであろうことは、その中の実朝についてかの『金槐集』のようなものがあるだけでなく、晩年かけて多くの諸歌作品がそれを証するのとおりである。

なお文学者に並べて見られるのは新しい出家僧侶であるが、まず、親鸞が越後山科の間を往復し、善光寺に参籠したのは建保元年の前年であり、禅僧の道元が少年の身ながら天台座主（公円）につき剃髪したのはその年のこと、かくて、その翌年に栄西の徳を慕うて登山し参禅したのである。今では、人々の交渉に係わる史蹟が明確でないが、文人は総じて天性明敏であるだけ、時代やその環境やの含む零閑氣を採入れるに敏感であったことが推測される。

そこで連想をしいられるのは、『寂身家集』のことである。寂身は在俗時代周防守であった。早く父は出家して能蓮のうれんと称して居て、かれ寂身も青年時代から、風雅と文藻とに心をひかれていたようである。西行は建保時代からみると二十余年前逝去したものとなっているが、寂身はその西行からすれば更にその影のような存在となった。統群書類従にある家集、『寂身法師集』をみると、その中に次の様な作が見られる。

いつ迄か空しきそらに辿りけん雲も霞も色ぞ残らぬ

人の世ぞなほもはかなき草の原消ゆべき雪も春を待ちつつ

この種の無常歌は、感傷の半面はそこに出ていても、なお、かれの生に対する無常思想というものの基調が背後に立っている。前者の歌は建保六年（一二二八）、『白氏文集』の中の「追想しんそう当時事トキノコト、何殊ナニカ昨夜中ノヨレ、自我学ジガガク三心法さんしんぽう、万縁ばんえん成なり空くう」という詩の一句あるのを鑑賞し、その暗示からこの歌を作り出したものらしく、後者の詠は貞応二年（一二二二）「無常」という題詠で詠み出したものだと説明を加えている。

しかしなお、和歌以外のジャンルで、「無常」の内容を持った歌謡類が別に珍しくはない。例えば『宴曲集』の巻四のものは『伊勢物語』とか『源氏』とかを含めているだけであって、「無常」という題の一曲が添っている。その前半の一部を引いて見ると次のようである。

眠りは五更に覚めぬれば、情有為の理を、思へば夢の他し世に、見し面影の百の媚千々の貌ばせも、刹那の生滅早く到り、幻夢影焰乾闥婆城の变化は、所執終ても無し。……若きを送る老の恨み、老いてはさらぬ別れの、千世もと祈る人の子の、歎きは憑む陰も無く、枯葉の浅茅生いま幾日は、結べば霜に弱る虫、後れ先立つ夕煙、雲となり、雨とや涙の時雨けむ（下略）

すべて各様の楽器にあわして唄う歌詞だけに、音数による調子が多く出すぎたという憾もあるが、その中の「さらぬ別れの」では『古今和歌集』の業平の名歌「世の中にさらぬ別れの無くもがな千世もと祈る人の子のため」を連想させ、「後れ先立つ」では、『新古今集』の遍昭の名歌「末の露もとの雪や世の中の後れ先立つためしなるらむ」を暗示せしめている。作品としてかかる辞句の巧拙はここで問題としないが、和歌において本歌取の苦心と同様に、作者としては、こうした通路に出ることがほとんど絶対に近くなっていたものらしい。

かくて「無常」それ自らも、単一な観念だけのものではなく、空・仮・中の三体をある点まで会得し、悟入して、信仰の禅機に触れるものと解してよいだろう。一般に、中世において、栄西や道元やの新禅宗が開かれた後、既成仏教と臨済・曹洞の禅とを別視するものが多くなったが、禅は天台仏教の部分として存したことは殊更に究めるまでもない事実である。

二 思 唯 深 心

つぎに、文学はどんな意味からいっても、人生の表象であると考えらるならば、その中に生活の諸様式が表わされることはもとよりのことである。なおその表現は、文学を媒介としている点に、文学は文学としての特性を帯びてくること当然と見なければならぬ。例えば、信仰精神は、すべての動物に見られない、人間特有の精神生活であるだけに、信心それ自らには濃淡や深淺の種別段階は存しても、キリスト教で聖書の編まれたことは、仏教で大蔵經の著わされたそれと同様にただの偶然事ではなかった。かつそうした教書は、神の徳や仏の徳が他国民や異民族の間に普遍化するにつれて、その都度都度に翻訳の勞さえとられてきているが、それはもっぱら、信者がわに宗教に対する理會の深みを求める念あつての結果だといわねばならぬ。

わが日本島は、およそ六世紀前後に、その時代、アジア大陸にも相當に普及していたらしい仏教の舶載をうけたわけであるが、當時の日本はいまだ特有の文字さえも發明していない程度の國であつて、一部の學者が漢字訳の仏典を繙き、「仏・法・僧」等の知識をいくぶん持ちえたという状態にすぎなかつたのである。かくて國民が漸く今の仮名文字を考案しその利用を知るに到つた八九世紀前後からは、教義の類を解釈する方法もいくぶんの進歩を見たのであるが、なおほとんど解説の範圍を出なかつたことは否みようもない状態であつた。

すべて仏教の普及は、その後の奈良時代を中心に、大仏の彫像や諸大寺の建築が物語るように、京都への遷都の実現されるまでの七代の奈良は、百濟の聖明王が献じたという當時の仏典の香りを持つたものであつた。しかしそれから引きつづいて、仏教思想の日本化が漸く著しくなり、例えば、『万葉集』編集後、題詞の中に出る漢訳の仏典の句を和訓化してゆく傾向にも似ているものがあつた。また王朝女流たちの日記の中には、その日本化の証として、本地垂迹説の普及した形跡さえが出ている。後白河法皇の御撰による『梁塵秘抄』の法文歌二百二十首は、たとえば始めは和讃歌の集成にしても、その作者はほとんど平安朝のものであつた。「ほとけは」を起句にした以下二句の作詞は、その

心境の深さ駭ろかされるばかりである。

○仏はさま／＼いませども まことは一仏なりとかや 薬師も弥陀も釈迦弥勒も さながら大日とこそ聞け

○仏は常にいませども 現ならぬぞあはれなる 人の音せぬあかつきに ほのかに夢に見え給ふ

これらが法華經二十八品のただの翻案歌と違ふところは、まったく、みほとけへの鑑賞が基調となつてゐることである。この種の体験は、表現がその作者を救いえただけでなく、この法歌を口ずさんだ他人をも限りなく救つたことを反慮させられる。後者のものは、第二句目が「現ならぬぞあはれなる」とあつて、かえつて、み仏がはつきりした正体を現わさないことを讃えたものとなつてゐるが、これは絶対の体験がもたらした信念から出たものである。『古今和歌集』以後、相ついで撰定された勅撰集の中、『後拾遺和歌集』までのものは部立として「哀傷」が掲げられている。三代集の『拾遺和歌集』では、第二〇巻目が哀傷部となつてゐるが、その中に題詞の多いことは、まず読者の注意をひくだろう。それも、贈答両方面の歌を並べて出したものには、それだけで全く物語的興味を催すもさえが見られる。その一二の例をしるすと、

(服に侍りける頃、相しりて侍りける女の尼になりぬと聞きて遣はしける——大中臣能宣)

墨染の色はわれのみと思ひしに憂世を背く人もありとか

(返し——よみ人しらず)

墨染の衣とみればよそながら諸共にきる色にぞありける

○

(聖徳太子片岡の山辺道人の家に坐しけるに、餓ゑたる人、道のほとりにふせり。太子の乗りたまへる馬とゞまりてゆかず。むちをあげて打ち給へど、しりへしりぞきてとゞまる。太子即ち馬よりおりて餓